



188人の福者

昨年四月からフランス、スペイン、ポルトガルを中心に書いてきた巡礼記は今回でひとまず終わり、次回からは「聖パウロゆかりの地・トルコ巡礼」へと筆を進める。

ところで先日、パチカン国務省から、日本の殉教者百八十八人の列福式を来年十一月二十四日に長崎で開くという発表があった。

「福者」とはカトリック教会で「聖人」に次ぐ者の敬称で、聖人の前段階である。

日本の聖人は一八六二年に列聖された「パ

ウロ三木と二十五殉教者(長崎の二十六聖人)と一九八七年に列聖された「トマス西と十五殉教者」の合わせて四十二人で、福者は一八六八年に列福された二百五人がいる。

これまでの聖人、福者には外国人宣教師が含まれていたが、今回の百八十八人はすべて日本人である。

今回の特徴の一つは司祭、修道者はわずか五人だけで、残りは全員が信徒。中でも十五歳以下の子どもが三十人も含まれている。これは何を意味するのだろうか？



殉教者の数は一万人とも言われる

ろうか？
信仰に生きた多くの

家族が、信仰というきずなでしっかり結ばれ、拷問にも堪え、最後まで互いの信仰を支え合ったからである。家族のきずなが弱まって今の社会へのメッセージを感じる。

今回、列福されるのは一六〇三年から一六三九年の間に殉教した人たちである。一五八七年の秀吉のキリスト

家族が、信仰というきずなでしっかり結ばれ、拷問にも堪え、最後まで互いの信仰を支え合ったからである。家族のきずなが弱まって今の社会へのメッセージを感じる。

今回、列福されるのは一六〇三年から一六三九年の間に殉教した人たちである。一五八七年の秀吉のキリスト

教禁教令、一六一四年の徳川の禁止令などが出されたあと、つまり迫害が始まったあとに育ち、生きた人たちである。迫害を知りながら命がけて信仰を持ったといえる。残酷な拷問にもかかわらず、命をかけて信仰を守り抜いた信徒が多いということ、信徒がしっかりと立した信仰をもっていた証ともいえる。

了悟神父。パチカンに提出した資料などを見せられたが、ばく大な量である。結城神父によれば、列聖・列福された殉教者は全殉教者の中のほんの一部で、資料にも残されていない、名もない殉教者の数は五千人とも一万人ともいわれる。

今年度の列福者の中で一番最後に殉教したのは大分県国東出身のベト口岐部である。彼は一六一四年、マカオを開放され、その後、司祭になるためシロクロードを歩いてロ



生誕地の大分県国東にあるベト口岐部像。(毎年十月に岐部祭が開かれる)

マに向かい、一六一〇年、現地で司祭に叙階された。しかし、日本での迫害が一段と激しくなつたことを知り、危険を顧みずに帰国。極秘に信仰を守り続ける信徒と喜びと苦しみをともにしながら最後は仙台で捕えられ一六三九年七月、殉教した。

迫害した人たちを憎まず、神を賛美しながら殉教した人の歴史を知る時「時代が違う」と言い訳する気にはなれない。(元山口放送取締役ラジオ局長)